

## 1 活動のねらい

ヤギとの生活をつくることを通して、自分とヤギ、自分と仲間とのかかわり方を見つめたり、仲間と共にまきばをひろげたりしながら、自らの生活を豊かにしていく。

## 2 なぜ「はなやぎまきば」なのか

人々は古くからヤギを家畜として生活を共にしてきた。ヤギは人懐っこく身を寄せたり、鳴き声を上げたりしてかかわり、人々もそれに応えることで関係を築いてきた。ヤギは人々と共に生活し、心を通わせてきた動物であると考えられる。

子どもはヤギと生活する中で、ヤギに寄り添いながら自分たちの生活をつくっていく。そして自分もヤギも気持ちのよいかかわりや場について考えていく。ヤギとの出あい、赤ちゃんヤギの出産と成長を通して、成長や仲間とのかかわりについてのとらえをひろげていくと考える。

子どもは出産を控えた母ヤギ1頭、友だちの子ヤギ2頭、そして誕生した赤ちゃんヤギと繰り返し活動しながら、仲間とまきばに親しんでいく。活動名の「はなやぎまきば」のはなやぎには、華やかになる、栄える、ときめくという意味がある。子どもはヤギと仲間とのかかわりに心をときめかせ、すすんでかかわったりまきばをひろげたりしていく。また、ヤギと暮らしを共にする中で、すすんでヤギのお世話をしたり、仲間と場をつくり変えたりしながら、ヤギに寄り添って生活していく。ヤギとのかかわりをきっかけに自分とヤギのかかわり方、自分と仲間とのかかわり方を見つめ、場をつくり変えながら自らの生活を豊かにしていく。

## 3 子どもの「問い」が立ちあがる環境

### ○はなやぎまきばでの気付きや思いを表現する

子どもは、ヤギと生活を共にすることでヤギの行動や成長の変化に気付いたり、ヤギに対して願いや思いを抱いたりし、毎日の振り返りや、絵、工作で表現していく。ヤギの成長をよく見つめたり、仲間の思いを知ったりすることで、ヤギとのかかわりをつくることをさらに楽しんだり、自分や仲間の成長を実感したりして、自分の生活をさらに豊かにしていく。

### ○ヤギと快適に過ごせる場をつくる

子どもはヤギとの出あいや出産、子ヤギの成長に応じて場をつくり変えるようになる。出産前の母ヤギに草でベッドをつくりたい、高いところが好きな子ヤギに高台をつくりたいと考え、ヤギが気持ちよ

く過ごせる場をつくっていく。赤ちゃんヤギの誕生と成長する姿からヤギと自分を重ねていくだろう。また、自分がつくった場をヤギが使う姿を見て、喜びを感じるだろう。ヤギとの生活について仲間と見つめていくことで、自分と仲間の生活も豊かにしていく。

## 4 対象とかかわる子ども

子どもは、ヤギとの生活に様々な思いをふくらませてきた。ヤギを迎え入れる場をつくろうと杭を打ったり、板を張ったり、ペンキで色を塗ったりして、柵をつくった。また、草を集めたり、キャベツを食べやすくちぎったりしながらヤギとの生活を思い描いた。

出あいの日。母ヤギを見た子どもは、体の大きさに驚くと共に、すぐにおなかの膨らみに気が付いた。

「赤ちゃんがいる」「おなか大きいよ」という声が上がった。子ヤギに比べ、ゆっくりと動く姿を見て「かわいい」、「優しい」「この子なら触れるかも」と話す子どもがいた。ちぎったキャベツをヤギが食べると「僕があげたキャベツを食べてくれた」と嬉しそうに話した。

ヤギと一緒にダンスをしたり、木登りをしたりと楽しみをつくっていった。ヤギとの散歩では、ヤギが草を食べようとあちこちを走り回ったり、木陰で寝転がって動かなかったりとなかなか思い描いたようにはいかない。ヤギの散歩を通して、ヤギがなぜ歩きたがらないのかと考え、葉っぱで誘ったり、一緒に走ったりとヤギとのかかわりをつくった。

7月31日に4匹の赤ちゃんヤギが誕生した。よちよちと歩いたり母ヤギの乳を探す姿を見て「こっちだよ、がんばって!」と声を掛けた。母ヤギに「がんばったね」「すごいよ」と声を掛ける子どももいた。赤ちゃんヤギばかりに人が集まり、子ヤギに人が集まらないことに気付いた子どもは、「ぶらうんとゆきみがかわいそう」「赤ちゃんもかわいけれど、僕はぶらうんが好きだな」と話す子どももいた。

2学期になりミルクを作ったり、抱っこしたりと赤ちゃんヤギとのかかわりが増え、新たな楽しみをつくってきた。「体が大きくなってきたね」「草も食べるようになったよ」と、ヤギの成長に喜びを感じている。体の大きさや走り方、抱っこしたときの様子など赤ちゃんヤギそれぞれの違いにも気付き、一匹一匹とのかかわりをつくりはじめている。

## 5 本時の構想・展開

### (1) 本時のねらい

ヤギとのかかわりについて振り返ったり、ヤギはどう思っているか考えたりすることを通して、ヤギが喜ぶかかわり方を見つめたり、まきばをつくりつくり変えたりしながら、ヤギと自分とのかかわりをつくる。

### (2) 本時の構想

#### ○ ヤギとのかかわりを振り返り、ヤギがどう思っているか考える場を設定する

子どもは、「ご飯をあげたい」、「リードをつないで散歩をしたい」、「ブラッシングをしたい」と自分がしたいことをもとにヤギとのかかわりをつくってきた。活動の中で、すすんで木登りをしながらない子ヤギを見て、「したくないのかな」とつぶやく子どもやリードを強く引っ張られる子ヤギの姿を見て「苦しそう」と話す子どももいる。自分がして

いるかかわりをヤギはどう思っているのだろうと考えることで、ヤギも自分も気持ちよく過ごせるかかわりについて見つめていくのである。

#### ○ ヤギがもっと喜ぶかかわりをつくる

子どもは、母ヤギが木陰でゆっくり休むのが好きなこと、赤ちゃんヤギが元気に走り回ることが好きなことを知った。そこで、母ヤギにおいしいご飯を作りたい、赤ちゃんヤギとあすれちっくに登りたいと願い、かかわりをつくっていく。

また、子どもはヤギが走り回ったり遊んだりできる場をつくりたいと考えている。赤ちゃんヤギが楽しく遊べるように、「おうちあすれちっく」をひろげたり、子ヤギがトンネルや高いところが好きなことから迷路をつくり、つくり変えていく。子どもは、ヤギと一緒に遊ぶ自分や、楽しく遊ぶヤギを思い浮かべ、ヤギがもっと喜ぶ場につくり変えていく。

### (3) 本時の展開 200・201 / 全436M (65分)

時間	番号;子どもの活動 ・ ;子どもの姿	○;教師の手立て
15	<b>1 木登り特訓を赤ちゃんヤギさんはどう思っているか話す</b> ・ 木登り特訓で「よつば」は、高いところまで登れて嬉しそうだったと話す。 ・ なかなか木から降りられなくて怖そうだったよと話す。 ・ 本当はしたくないのかもしれないなと話す。 ・ でも、ちゃんと進んでくれることもあるよと話す。 ・ リードをつけると、首が苦しくて嫌なのではないかと話す。 ・ ゆきみみたいに木登りが上手になって欲しいなと話す。	○子どもの作文シートの記述を提示する。 ○子どもの話をかかわりごとに整理して板書する。
40	<b>2 それぞれにしたい活動に取り組む</b> ・ 赤ちゃんヤギが苦しくない向きに哺乳瓶を傾けてミルクを作って飲ませる。 ・ 「るる」が好きな「あすれちっく」で遊ぶ。 ・ 「ふおるて」と「よつば」と木登り特訓をする。 ・ 「まるん」と散歩をしたり葉や木の実をあげたりする。 ・ 「ゆきみ」と「ぶらうん」の運動場にひろげた迷路で遊んだり、迷路をつくり変えたりする。	○粉ミルク、哺乳瓶、お湯、水を用意する。 ○ブラッシング用のブラシを用意する。 ○工具や木材を用意して場づくりができるようにする。
10	<b>3 今日の活動の振り返りを話す</b> ・ 散歩をするときに、ヤギさんをよく見ながら優しく引っ張ったら、前より楽しそうにお散歩ができたと話す。 ・ なでなでするときに、首をブラッシングしたら気持ちよさそうだった。またしてあげたいなと話す。 ・ 名前を呼んでからご飯をあげたら「めえ」と鳴いた。おいしいって言っているのかな。次はもっと喜ばせてあげたいなと話す。	○子どもが書いた内容が次の活動につながるようにする。

## 6 活動の振り返り

### (1) ヤギさんと共に成長する子ども

5月28日、子どもは雌ヤギ「まろん」と双子の「ゆきみ」と「ぶらうん」と出あった。「まろん」は妊娠しており、子どもは、辛そうに歩く「まろん」に寄り添って歩いたり、「まろん」にお守りをつくったりして「まろん」の出産を応援した。

7月31日、「まろん」が4匹の赤ちゃんヤギを出産した。「まろん」、双子の兄弟ヤギの「ゆきみ」と「ぶらうん」、そして生まれたばかりの4匹の赤ちゃんヤギ（「ふおるて」、「るる」、「よつば」、「つきみ」）との生活が始まった。



2学期になり子どもは、赤ちゃんヤギに「木登り特訓」を始めた。『ゆきみ』や『ぶらうん』みたいに、上手に木登りができるようになってほしい「大きくて元気なヤギさんになってほしい」と赤ちゃんヤギの成長を願って始めた活動である。子どもは低い木から特訓を始めた。木の上に乗せて少しずつ登る赤ちゃんヤギの様子を見守った。赤ちゃんヤギが一歩進むごとに、「すごーい!」「がんばれー!」という声が原っぱに響いた。目標にしていたところまで登ると、「やったあー!」と話し、赤ちゃんヤギの成長を喜ぶ姿があった。子どもは木登り特訓から、自分が作った「あすれちっく」での特訓へと活動をひろげた。ある日、美香さんが次のように作文シートに書いた。

きょうは、ふおるてのりいどをしました。ふおるてとあすれちっくのつくくをしました。あんまりすすんでくれなかったです。わたしは、りいどができてたのしかったです。でも、ヤギさんはどうおもっているのかな。

これは、「ふおるて」があすれちっく特訓をしたがらない事実から、美香さんは、「ふおるて」の気持ち

を見つめようとしている姿であるにとらえた。「ヤギさんはどう思っているだろう」とヤギの気持ちを考えて作文シートに書いた子どもが複数いたことから私は、「木登り特訓をすることをヤギさんはどう思っているだろうか」と子どもに投げかけた。

### (2) 「ヤギさんも自分たちも同じ」

私が投げかけると、新太さんは、『ふおるて』は、登りたいときは、自分からすいすいと登っていく。登りたくないときは、足が動かないよ」と話した。香理さんは、『よつば』は、木登りはできるけれど、降りるときになかなか足が動かないことがあったよ」「降りるときは下が見えて怖いのかも知れない。そういうときは、ミルクで誘ったり、抱っこをしたりして降りるようにしているよ」と話し、特訓で一匹一匹の赤ちゃんヤギとのかかわりを思い起こした。そして、「赤ちゃんヤギさんも楽しく特訓できるようにしたい」と話した。



また、真奈美さんは、「ヤギさんも人間も同じだよ。人間だって嫌なことをされたら嫌でしょ。体や形は違うけれど、心は一緒だよ」と話した。ヤギとかかわる中で、ヤギも自分たちも同じ仲間、違いはないのだという考えをつくってきたことをとらえた。真奈美さんはこれまで、「ヤギさんの『めえ〜』にはいろんな『めえ〜』がある」と話し、ヤギさんの「めえ〜」に込めた思いに気付きたいとヤギの気持ちに寄り添いながら活動をしてきた。日頃から活動を通して溜めてきたヤギへの思いが表れた言葉であった。

### (3) ヤギとのかかわりをひろげる子ども

子どもは原っぱに向かうと、思い思いにヤギとの楽しみをつくり始めた。

香理さんは、赤ちゃんヤギの「よつば」にリードをつないでお散歩を始めた。「今日は、『よつば』が行き

たい所に行かせてあげたい」と話し、「よつば」に合わせて一緒に歩き始めた。すると、香理さんは、「よつば」が木に飛び乗ったことから、「木登りをしたいのかな?」と思い、「よつば」を見守りながら木登りを応援し始めた。香理さんは、「大丈夫?慌てなくて良いよ、ゆっくりやろう。行きたいときに登れば良いよ。」と話し、「よつば」の気持ちに寄り添って話しかけた。その後、すいすいと登り始めたよつばに、「すごーい!」と拍手して喜んだのもつかの間、今度は、高い所から降りられなくなってしまった。心配そうに下を見る「よつば」を見て、真奈美さんがミルクを持ってきて、「よつば」を少しずつ下に降りられるようにとはたらきかけた。一步一步降りる「よつば」を二人で懸命に誘導し、ついに「よつば」が降りることができたとき、ほっと息をついた。香理さんは作文シートに思いを書いた。

きょうは、よつばのリードをしました。よつばのすきなばしょにいかせてあげよつかなあっておもってよつばについていきました。そうしたら、きのぼりをしたよ。たかいところまでいったよ。でもおりられなかったから、みるくでよんでおろしてあげたよ。りーどですきなところにかせてあげたから、よつばはうれしかったかも!?



香理さんの姿は、「よつば」の行動から「よつば」の気持ちを見つめ、「よつば」がうれしくなるようなかかわりについて考えた姿であったと私はとらえた。仲間とともに目の前のヤギの気持ちを見つめ続けたからこそ、香理さんとヤギのストーリーが見られたのであろう。

学さんは、「るる」とリードをつないで一緒にアスレチックを始めた。少し歩くと、「るる」が動かず、思わずリードをひいた。すると、周りの子どもから「強く引いたらかわいそうだよ」と言われた。学さんは、腰をかがめて視線をずっと「るる」に下ろすと「るる、どこに行きたい?」と語りかけた。「るる」に語りかける学さんの姿は、「るる」の気持ちを尊重しようとする姿であったととらえた。「るる」が本当は何をしたいのか、一緒にどんなことをしたいか、自分の思いと「るる」の思いを重ねながら、活動をつくりはじめた学さんの姿があった。

#### (4) 子どもと見つめる事実をどうとらえるか

自分の行為をヤギの立ち位置から見つめることを思い描いた今回ののはたらきかけは子どもにとって難しいものであったかもしれない。しかし、周りの子どものヤギとのかかわりを見つめることから、自分とヤギとのかかわりについて見つめ直すことができた。周りの子どもとヤギとのかかわりを見つめる中で「自分のかかわりはどうだったろうか」と自分のかかわりを見つめる姿が見られ始めたと考える。これらのことから、今回のように自分のこれまでの活動を見つめることも時には必要である。

そして、1年生の子どもが自ら活動をつくり、活動を加速していくには、子どもの思いや願いを教師がとらえ、楽しみがさらに膨らむ事実を子どもに示す必要がある。今、子どもが見つめていることをつぶさに見とり、そこから子どもがどうヤギとのかかわりをつくっていくかを教師が思い描くことが、子どもが自ら楽しみをつくる上で重要な視点である。ヤギと生活をつくり、楽しみをつくっていく中で、ヤギと自分の成長のとらえをますますひろげていくのである。

<メールにて本活動に関するご質問、ご意見、ご感想をお寄せください>

提案者連絡先 [mdaiki@juen.co.jp](mailto:mdaiki@juen.co.jp) (丸山大貴)